謙遜に対する否定反応は再謙遜をもたらすか？

Does a negative reaction to humility lead to re-humiliation?

関　　智　香　　尾　見　康　博
SEKI Tomoka　　OMI Yasuhiro

山梨大学教育学部紀要　第 33 号　2022 年度抜刷

謙遜に対する否定反応は再謙遜をもたらすか？[1)]

Does a negative reaction to humility lead to re-humiliation?

関　智香[*2)]　尾見康博
SEKI Tomoka　OMI Yasuhiro

要旨：日本人の文化的特徴を表すとされている自己卑下傾向について，特に謙遜に焦点を当てて検討した。謙遜の受け手が謙遜の内容を否定し，相手を持ち上げることは，再度の謙遜を期待しているのか，それともその持ち上げを受け入れることを期待しているのか，について，持ち上げ方法の違いから明らかにすることを目的とした。謙遜に対してたんに否定する以上に持ち上げるときには，謙遜者に対して持ち上げの受け入れは期待せず，再度の謙遜を期待するであろうという仮説を立て，大学生を対象にウェブ調査を実施した。謙遜の受け手は，自身との比較で相手の謙遜を否定した場合（比較持ち上げ）には，その持ち上げを受け入れることに対してより否定的であったという点では仮説が一部支持された。他方，持ち上げに対して，受け入れよりも再度の謙遜を期待することはどの条件においても見受けられず，全体としては仮説が支持されなかった。

１．問題と目的

１．１　日本人の自己卑下の背景

私たちは，他者からの評価に影響を受けながら他者とのやり取りを調整しており，あるときは他者に見栄を張り，またあるときには控えめに自分を表現したりする。他者とのコミュニケーションにおけるこうした自己表現には文化的な差異が見られ，一般に，欧米では自己評価を高めようとする自己高揚傾向が強く，日本では逆に自己評価を低めようとする自己卑下傾向が強いという知見が蓄積されている（e.g., Heine, Takata, & Lehman, 2000; 北山, 1994; Markus & Kitayama, 1991）。そして，欧米では，自分の成功を能力・努力などの内的要因に帰属し，失敗を運・課題の困難さなどの外的要因に帰属するのに対し，東アジアの文化では，自分の成功を外的要因に帰属し，自分の失敗を内的要因に帰属する傾向がみられるが，この自己奉仕バイアスが日本では見られないといわれている[3)]（e.g. 北山・高木・松本，1995）。

これまで，日本人の自己卑下傾向については，「文化的自己観」と「自己呈示」の２つの観点から検討されてきた（村上・石黒，2005）。

文化的自己観によるアプローチでは，日本人に見られるような自己卑下傾向は，文化によって規定される自己概念そのものの差異に起因すると主張する（e.g., 北山，1998）。文化的自己観の概念は，Triandis（1989）が世界の文化を個人主義と集団主義の文化に分類したことから生まれたが，Markus and Kitayama（1991）は，この個人主義－集団主義の文化のメンバーそれぞれが持つ自己概念を「相互独立的自己観」と「相互協調的自己観」に整理した。Markus and Kitayama（1991）によれば，人は自己を肯定的に評価しようとするが，何が肯定的であるかは文化によって異なるとし，人間を独立した存在としてみる欧米などの個人主義文化の個人は相互独立的自己観を発達させ，ユニークさ，自己

[1)] 本論文は第１著者が 2021 年度に山梨大学教育学部へ提出した卒業論文を加筆・修正したものである。
[*2)] 特別支援教育特別専攻科
[3)] 日本人はいつでも自己卑下的帰属をするのではなく，集団の中の自分については自己卑下するが，自集団については高揚的であるという知見も提出されている（村本・山口，1997）。

主張が評価されるため自己高揚的帰属傾向が生じるとした。他方，集団内のメンバーとの関係性を重視する東アジアなどの集団主義文化の個人は相互協調的自己観を発達させ，他者を高揚し自己を卑下する帰属傾向が生じるとした。相互協調的な日本文化（Markus & Kitayama, 1991）では，他者との関係性の崩壊が自己にとって極めて大きな打撃となるため，関係をないがしろにするような自己の優位性の表明が避けられ，人々が自己卑下に向かうのである（福島，1996）。

また，集団主義文化では，自己の劣った属性を発見し，努力によってそれを改善しようとする自己向上動機（Taylor, Neter, & Waymont, 1995）が優勢であるとも指摘されている（Heine, Kitayama, Lehman, Takata, Ide, Leung, & Matsumoto, 2001; 北山, 1998）。これは，自己卑下的であるからといって日本人に自己向上意識がないわけではないことを説明している。自己実現の際，欧米人は自己の望ましい属性を肯定的に評価しようと動機づけられるのに対し，日本人はまず自己批判的に自己の望ましくない属性を見いだし，これをなくすよう，実際の行動でそれに努めるように動機づけられていると考えるのである（北山・唐澤，1995）。

そして，日本人の自己卑下傾向について別の視点でとらえた立場が，「自己呈示」の研究である。これは，日本人が自己卑下的な行動をとるのは，自分の劣った点に注意を向けるからというよりは，単に自己呈示の方略であると考える立場である。

自己呈示とは，何らかの目標のために，他者が形成する自らの印象をコントロールしようと試みることである（Leary & Kowalski, 1990）。つまり，自己呈示の観点から捉えれば，自己卑下は相互作用する他者に肯定的な印象を与える手段として位置づけられる（村上・石黒， 2005）。自己呈示はその機能から「自己高揚的呈示－自己卑下的呈示」に分類され，前者は自分の能力や遂行水準などが優れていることを表明するような自己呈示であり，逆に後者は否定的あるいは非難するような自己呈示である（栗林，1995）。

つまり，自己呈示の立場から自己卑下を説明すると，日本には謙譲の美徳があり，自己の成功や能力の高さを人前で公言する人は，傲慢でうぬぼれが強い性格であると評価され，そのような評価は円滑な人間関係を形成する上で障害となるため，日本人は人前ではなるべく目立たないように振舞う，ということになる（築島，1976）。

１．２　自己卑下と謙遜

自己卑下呈示は，その具体的な対人状況での使われ方から２つのタイプに分類することができる（相川，2003）。ひとつは，自己の能力や遂行水準が実際に低いので，そのことをあえて他者に提示することで，他者から肯定的な評価（例えば“素直である”という評価）を得ようとする場合である。もうひとつは，実際には自己の能力や遂行水準が高いのにもかかわらず，それを表明しなかったり隠したりして，むしろ否定的に自己を呈示することによって他者から肯定的な評価を得ようとする場合である。この２つを区別せずに行われている研究もあるが，栗原（1995）が後者を「謙遜」としていたことを受け，相川（2003）は謙遜を「実際には自己の能力や遂行水準が高いのにもかかわらず，それを表明しなかったり隠したりして，否定的に自己を表現することによって他者から肯定的な評価を得ようとする自己卑下的な自己呈示のこと」と定義した。本研究でもこの定義に従い，自己呈示としての自己卑下，その中でも「謙遜」に着目する。

１．３　謙遜への心理学的アプローチ

謙遜についての研究は，謙遜の動機や規定因など呈示者の視点に立つものから，呈示者の印象や能力推定など謙遜を受ける側の受け取り方に着目したもの，そして，謙遜が受け手に与える影響まで幅広くなされている。

例えば，呈示者の視点に立つ研究として，吉田・古城・加来（1982）は，児童の自己呈示の発達に着目し，小学校低学年から高学年になるに従って，自己高揚的自己呈示から自己卑下的自己呈示へと呈示方法を変化させることを示した。また，伊藤（1998）は，日本では，自己卑下呈示が自己への他者の期待を低めたり責任追及をかわしたりするだけではなく，控えめな人物として好印象を抱かせ，他者から同情や哀れみを引き出し，援助やサポートを得る可能性があることを指摘した。さらに，匿名状況で生まれる自己卑下的な行動の動機に着目した鈴木・山岸（2004）は，正確な自己評価を強く求められた際には自己評価が高くなったことから，日本人の自己評価は必ずしも自己卑下的なものではなく，むしろ自己高揚的であることを示し，日本人は匿名状況であっても，日本文化においてもっとも無難でエラーの少ない自己卑下呈示を選択するという「デフォルトの自己呈示説」を提唱した。

他方，自己呈示に関する研究ではその規定因や動機づけに関する研究が多く，自己呈示が実際に他者に対してどのような効果を与えるか検討した研究はそれほど多くは行われていないという指摘（沼崎・工藤，2003）以降，謙遜の効果についての知見が見られるようになった。例えば，稲富・山口（2004）は，自己卑下呈示に対して受け手が作為性を高く認知するとき，呈示者の印象が否定的な内容になることを明らかにした。また，実際に受け手の評価を測定した樋口・川村・原・塚脇・深田（2007）では，「意欲的である」「堂々とした」といった印象を与えたい場合には，自己卑下呈示は逆効果であることも見出された。

そして，謙遜が受け手に与える影響として，受け手は相手との将来の相互作用の予期がある場合には，返報性の規範によって相手の自己呈示方略の影響を受けるのではないかという仮説（笠置・外山・大坊，2008）を受け，吉田（2014）は，将来の相互作用の予期がされない知人による信憑性が低い自己卑下呈示は，受け手に自己批判傾向を生じさせ，将来の相互作用の予期がある友人による信憑性の高い自己卑下呈示は，受け手に自己向上傾向を生じさせることを明らかにした。

このように，日本人の謙遜に関する研究は，呈示者から受け手へと視点を変えてなされてきたが，受け手の反応がさらに呈示者に与える影響について，吉田・浦（2003）は，呈示者が，周囲の友人から「そんなことないよ」と謙遜を否定する反応が返されたと見なすほど，自己評価の維持・高揚が生じることを明らかにした。

しかしながら，受け手が謙遜に関して「そんなことないよ」と謙遜を否定した後の呈示者側の対応やその後のプロセスについての研究はなされていない。実際は，受け手が「そんなことないよ」と謙遜を否定したところでコミュニケーションは終わらず，呈示者側がその否定を受け入れる，さらに謙遜するなどのやり取りが続くことが多い。日本文化では呈示者が「自己卑下的な振る舞いに対して周囲の他者は否定反応を返す傾向がある」というスクリプトを形成している（吉田・浦・黒川，2004）ように，受け手側も否定反応後の呈示者の対応についてスクリプトを形成していると考えられる。

１．４　本研究の目的

本研究の目的は，謙遜の受け手が「そんなことないよ」と謙遜者を持ち上げたあとの謙遜者の対応について，受け手がどのような期待をしているのかを明らかにすることである。具体的には，謙遜の受け手が持ち上げを行ったあと，謙遜者が再び謙遜をするのか持ち上げを受け入れるのかによって，受け手の気持ちがどのように異なるかを測定し，謙遜者の対応として受け手が無自覚に期待していることを明らかにする。

謙遜は，人々が他者に対して行うコミュニケーション活動のひとつであり，謙遜が行われる場にはかならず，謙遜を行う者と謙遜を受ける者とが存在する。謙遜は両者の相互作用として生じるのであり，謙遜を行う者の自己観や，社会規範にのみかかわる現象ではない（村上・石黒，2005）。本研究でも，謙遜を相互作用的なコミュニケーションとして検討するために，謙遜の内容や謙遜する側とさ

れる側の関係性，謙遜の否定方法についてより現実的になるように設定した。具体的な設定内容は以下のとおりである。

謙遜の内容　褒めと謙遜の関係について研究した大野（2010）は，謙遜には，褒めに対する返答などの「受動的謙遜」と謙遜者自らが積極的に行う「自発的謙遜」の２種類があると述べた。褒めに対して必ずしも謙遜が起こるとは限らないという点を考慮し，本研究では「自発的謙遜」について取り扱う。また，吉富（2007）は，謙遜を，「愚妻」「粗茶」などの単語自体が明らかに謙遜を意味する「明示的謙遜」と，明示的謙遜を含まず文脈やセンテンスにより謙遜を表現する暗示的謙遜表現に分類した。コミュニケーション上，明示的謙遜はそれ自体の意味は重要でなく，使用することで日本的な文化規範に則っていることを示す儀礼的なものであり，受け手が真に受けて否定反応を示すことは起こりにくいと考えられることから，本研究では「暗示的謙遜」について取り扱う。具体的には，本実験の参加者である大学生が想起しやすいように大学の授業での発表場面を設定し，授業終了後，発表内容を先生に褒められた友人から「発表がうまくいかなかった」と話しかけられるという自発的で明示的な謙遜内容とした。

謙遜者と受け手の関係性　Tice, Butler, Muraven, & Stillwel（1995）はアメリカ人を対象に，知人には自己高揚的な呈示が行われるが，友人にはやや控えめな自己呈示が行われることを見出している。一般に自己高揚的であるとされる北米であっても、友人のように関係配慮的であることが期待される関係性においては、自己卑下が行われやすいと言える（吉田，2014）。また，友人より近い関係について，Leary, Nezlek, Downs, Radford-Davenport, Martin, & McMullen（1994）は，熟知性の低い他者に対してのほうが熟知性の高い他者に対してよりも自己呈示動機が高いことを示した。これを受けて，日本人を対象に，関係性が謙遜の生じやすさに与える影響を研究した石黒・村上（2007）は，配偶者・親友などの近い関係では謙遜行動が生じにくいことを明らかにした。以上のことから，本研究では謙遜者と受け手の関係性を，知人以上，親友以下の友人に設定した。

謙遜否定の方法　自己卑下呈示に対して他者が持ち上げたということは，その他者は呈示者が卑下した内容を事実ではなく“卑下”として見なしたことを意味している（吉田・浦，2003）。そして，日本文化では謙遜者が「自己卑下的な振る舞いに対して周囲の他者は否定反応を返す傾向がある」というスクリプトを形成していることが示されており（吉田・浦・黒川，2004），本研究では謙遜の受け手の反応を「否定反応」すなわち「持ち上げ」に限定した。しかし，謙遜者の謙遜行動と受け手の持ち上げ行動の関連を検討した村上・石黒（2005）は，吉田・浦（2003）が論じた否定反応の中から「そんなことはない」と持ち上げる行動だけを取り出したことが，謙遜者の謙遜行動と受け手の行動の関連を小さくした可能性を指摘した。このことは，持ち上げる行動にいくつか種類をもたせていれば，謙遜者の謙遜行動と受け手の持ち上げ行動により強い関連がみられた可能性を示している。したがって，本研究では，「そんなことないよ」という“単純持ち上げ”のほかに，「そんなことないよ。すごく上手だったよ。」と持ち上げのあとに賞賛もする“賞賛持ち上げ”，「そんなことなかったよ。私より上手だったよ。」と持ち上げのあとに自分と比較した賞賛も行う“比較持ち上げ”の３つの持ち上げ方法を用意した。

仮説　謙遜の受け手にとって，「単純持ち上げ」は謙遜によって下がった謙遜者の立ち位置をもとに戻す方法，「賞賛持ち上げ」は元に戻したあとさらに上げる方法，「比較持ち上げ」は元に戻しつつ自分を下げて相対的に謙遜者を上げる方法だといえる。そうであるとすると，受け手が単純持ち上げを行ったあとは，下がったものを上げるという働きの自然さから，謙遜者がそれを受け入れても受け入れなくても，謙遜を否定して持ち上げた受け手の気持ちに差は見られないと考えられる。賞賛持ち上げや比較持ち上げを行ったあとは，下がったものを上げる働きに加えてさらに相手の立ち位置を上げる働きが加わっていることから，受け手は持ち上げを受け入れるより，再び謙遜されることを期待す

るだろう。

また，３つの方法の持ち上げの度合いに関しては，自分を謙遜者よりも下げることから「比較持ち上げ」が最も持ち上げの度合いが強く，元の位置関係に戻すだけの「単純持ち上げ」が最も持ち上げの度合いが弱いという順序関係がある。そのように考えると，持ち上げの程度が強いほど，謙遜者は受け手より下の立ち位置に戻ろうとする行動が自然になると考えられるため，受け手は再び謙遜されることを期待し，そのまま受け入れられることを期待しないだろう。

そして，期待通りに受け入れや再謙遜した場合には期待どおりでなかった場合に比べて肯定的感情が強まり，否定的感情が弱まり，コミュニケーションにおけるスムーズさを感じると考えられる。

以上のことから，以下の2つの仮説が導き出される。

＜仮説１＞謙遜の受け手は，単純持ち上げを行ったあとにそれが受け入れられることと再び謙遜されることへの期待に差は見られないが，賞賛持ち上げや比較持ち上げを行ったあとは受け入れられることよりも再謙遜されることを期待する。
＜仮説２＞謙遜の受け手は，持ち上げの程度が強いほどその持ち上げが受け入れられることを期待せず，再謙遜されることを期待する。

具体的な作業仮説は以下の通りとなる。

＜仮説１－１＞謙遜の受け手が単純持ち上げを行ったあとは，受け入れられる時と再謙遜されるときの間で，ポジティブ感情，ネガティブ感情，コミュニケーションのスムーズさに差がみられない。
＜仮説１－２＞謙遜の受け手が賞賛持ち上げを行ったあとは，受け入れられるよりも再謙遜されたほうがポジティブな感情が強く，ネガティブな感情が弱く，スムーズなコミュニケーションだと感じる。
＜仮説１－３＞謙遜の受け手が比較持ち上げを行ったあとは，受け入れられるよりも再謙遜されたほうがポジティブな感情が強く，ネガティブな感情が弱く，スムーズなコミュニケーションだと感じる。
＜仮説２－１＞謙遜者に持ち上げを受け入れられた際，受け手は比較持ち上げ，賞賛持ち上げ，単純持ち上げの順に，ポジティブな感情は弱く，ネガティブな感情が強く，コミュニケーションのスムーズさを感じにくくなる。
＜仮説２－２＞謙遜者への持ち上げに対して再謙遜された際，受け手は比較持ち上げ，賞賛持ち上げ，単純持ち上げの順に，ポジティブな感情が強く，ネガティブな感情が弱く，スムーズなコミュニケーションだと感じる。

２．方法

要因計画　謙遜の受け手（実験参加者）の反応を説明する要因として，謙遜の受け手の持ち上げ方法（単純持ち上げ群・賞賛持ち上げ群・比較持ち上げ群）を被験者間要因，持ち上げられた謙遜者の対応（再謙遜・受け入れ）を被験者内要因とする，３×２の２要因混合デザインであった。本研究における分析はすべて，統計解析システムR 4. 1 .2（R Core Team, 2021）を使用した。

実験参加者　山梨大学の学生177名。各群の実験参加者数は，単純持ち上げ群55名，賞賛持ち上げ群60名，比較持ち上げ群62名であった。

調査時期　2021年11月上旬から12月上旬に実施した。

手続き　Googleフォームによるウェブ調査を作成し，調査した。ウェブ調査は，フェイスシート，謙

遜場面の提示，再謙遜場面の提示及び従属変数の提示，受け入れ場面の提示及び従属変数の提示，謙遜支持項目から構成された。具体的には以下の通りである。

(1) フェイスシート：被験者の年齢・性別

(2) 場面呈示：謙遜場面の呈示のあと，再謙遜場面，受け入れ場面が提示された。再謙遜場面と受け入れ場面の順序はカウンターバランスされた。

＜謙遜場面（共通）＞

あなたと友だちAは，同性で同学年の大学生です。Aとは大学で会ったら話しますが，プライベートで会ったことはありません。その日は授業があり，あなたもAも先生から授業内容を褒められました。授業終了後，近くに座っていたAが，「今日の発表全然うまくいかなかった～」と話しかけてきました。

＜再謙遜場面＞

（単純持ち上げ群）

あなたが「そんなことなかったよ」と伝えると，Aは「いやいや，そんなにうまくいかなかったんだって～」と言いました。

（賞賛持ち上げ群）

あなたが「そんなことなかったよ。すごく上手だった！」と伝えると，Aは「いやいや，そんなにうまくいかなかったんだって～」と言いました。

（比較持ち上げ群）

あなたが「そんなことなかったよ。私（僕／俺）より上手だった！」と伝えると，Aは「いやいや，そんなにうまくいかなかったんだって～」と言いました。

＜受け入れ場面＞

（単純持ち上げ群）

あなたが「そんなことなかったよ」と伝えると，Aは「そう？それならよかった。」と言いました。

（賞賛持ち上げ群）

あなたが「そんなことなかったよ。すごく上手だった！」と伝えると,Aは「そう？それならよかった。」と言いました。

（比較持ち上げ群）

あなたが「そんなことなかったよ。私（僕／俺）より上手だった！」と伝えると，Aは「そう？それならよかった。」と言いました。

(3) 従属変数：友だちAの最後の言葉を受けた時の肯定感情・否定感情・コミュニケーションのスムーズさを示す７つの項目について，再謙遜場面・受け入れ場面それぞれにおいて，６件法を用いて測定した。

(4) 謙遜支持：謙遜支持に関する質問項目は，村上・石黒（2005）で使用されていたものと同じものを使用した。「あなたと同性で同学年の友人のうち，会ったら話をするけれど，プライベートで遊んだことはないような関係性の人たちを思い浮かべてください。」と呈示したうえで，実験参加者の謙遜支持について測定した。具体的には，「その人たちと話すとき，自分がしたことについて相手に話すときは，控えめにする。」「その人たちと話すとき，自分が得意なことは，相手から聞かれるまで言わない。」「その人たちと話すとき，自分が成功したことは，どんなに嬉しくても相手には控えめに伝える。」の３項目について，「そうしない」「どちらかというとそうしない」「どちらかというとそうする」「そうする」の４段階で測定した。

３．結果

３．１　謙遜支持を基準とした三群の等質性の検討

持ち上げ方法を独立変数とし，受け手の謙遜支持を従属変数とした一元配置の分散分析を行った結果，謙遜支持の３項目ともに持ち上げ方法の間に差はみられず（Table 1），三群間に等質性があると判断された。

Table 1　持ち上げ方法の違いによる謙遜支持の平均値の差

	単純持ち上げ（n = 50）	賞賛持ち上げ（n = 60）	比較持ち上げ（n = 62）
自分のしたことについて相手に話すときは控えめにする	2.85 (0.89)	3.12 (1.03)	3.05 (0.86)
自分が得意なことは相手から聞かれるまで言わない	3.09 (0.75)	3.22 (0.87)	3.11 (0.77)
自分が成功したことはどんなに嬉しくても相手には控えめに伝える	2.91 (0.84)	2.97 (0.99)	2.82 (0.82)

（）内は標準偏差

３．２「謙遜の受け手の持ち上げ方法」と「持ち上げられた謙遜者の対応」が，謙遜の受け手の気持ちに与える効果の検討

謙遜の受け手の持ち上げ方法，持ち上げられた謙遜者の対応を独立変数とし，受け手の気持ちを従属変数として二要因分散分析を行った（Table 2）。ポジティブ感情，ネガティブ感情，スムーズ感それぞれの結果は以下のとおりである。

肯定感情：安心　「謙遜の受け手の持ち上げ方法」と「持ち上げられた謙遜者の対応」の交互作用が有意であった（F (2,174)=11.47, p <.001, η^2=.045）。単純主効果の検定及び多重比較の結果（Table 3-1, Table 3-2），単純持ち上げ，賞賛持ち上げ，比較持ち上げすべてにおいて，再謙遜より受け入れのほうが安心していた（F (1,54)=21.21, p <.001, η^2=.161 ; F（1,59)=72.09, p <.001, η^2=.345 ; F（1,61)=3.87, p <.10, η^2=024）。また，謙遜受け入れ時には，比較持ち上げよりも単純持ち上げと賞賛持ち上げのほうが安心していた（F (2,174)=11.52, p <.001, η^2=.117）。再謙遜時には差がみられなかった（F (2,174)=0.79, n.s. , η^2=.009）。

Table 2　持ち上げ方法×謙遜者の対応ごとの測定値の平均と二要因分散分析の結果

	単純持ち上げ（n = 55）		賞賛持ち上げ（n = 60）		比較持ち上げ（n = 62）		方法 F 値	対応 F 値	交互作用 F 値
	再謙遜	受け入れ	再謙遜	受け入れ	再謙遜	受け入れ			
安心	2.29	3.55	2.05	4.12	2.31	2.74	4.34 *	78.27 ***	11.47 ***
	(1.21)	(1.64)	(1.23)	(1.62)	(1.30)	(1.51)			
気分がいい	2.24	3.29	1.98	4.03	2.18	2.65	6.60 **	6.60 ***	13.44 ***
	(0.98)	(1.56)	(0.98)	(1.31)	(1.15)	(1.39)			
嫌な気持ち	2.73	1.84	2.65	1.45	2.19	2.47	1.30 ns	22.21 ***	12.62 ***
	(1.50)	(1.13)	(1.52)	(0.83)	(1.20)	(1.63)			
納得いかない	3.11	2.15	3.15	1.70	2.71	2.35	0.55 ns	40.69 ***	4.97 **
	(1.42)	(1.45)	(1.77)	(1.01)	(1.25)	(1.46)			
むっとする	2.53	1.85	2.73	1.57	2.53	2.42	1.62 ns	27.41 ***	6.22 **
	(1.33)	(1.21)	(1.59)	(1.01)	(1.34)	(1.58)			
違和感	3.04	2.36	3.07	1.68	2.84	2.60	1.79 ns	26.60 ***	5.18 **
	(1.55)	(1.41)	(1.68)	(1.14)	(1.45)	(1.63)			
自然さ	4.13	4.45	3.95	5.10	4.06	4.29	1.63 ns	17.11 ***	4.63 *
	(1.26)	(4.45)	(1.60)	(1.20)	(1.38)	(1.55)			

( )内は標準偏差　　*p < .05, **p < .01, ***p < .001

Table 3-1 「安心」に関する単純主効果

要因	SS	df	MS	F-ratio	p-value	eta^2
再謙遜における持ち上げ方法	2.47	2	1.23	0.79	0.455 ns	0.009
受け入れにおける持ち上げ方法	58.24	2	29.12	11.52	0.000 ***	0.117
単純持ち上げにおける謙遜者の反応	43.28	1	43.28	21.21	0.000 ***	0.161
賞賛持ち上げにおける謙遜者の反応	128.13	1	128.13	72.09	0.000 ***	0.345
比較持ち上げにおける謙遜者の反応	5.88	1	5.88	3.87	0.054 †	0.024

†p < .10, ***p < .001

Table 3-2　受け入れの際の持ち上げ条件間の「安心」得点の差

	Diff	t-value	df	p	adj.p	
賞賛持ち上げ－比較持ち上げ	1.37	4.78	174	0.000	0.000	賞賛持ち上げ＞比較持ち上げ *
単純持ち上げ－比較持ち上げ	0.80	2.73	174	0.007	0.000	単純持ち上げ＞比較持ち上げ *
単純持ち上げ－賞賛持ち上げ	-0.57	1.92	174	0.056	0.056	単純持ち上げ＝賞賛持ち上げ

肯定感情：気分がいい　「謙遜の受け手の持ち上げ方法」と「持ち上げられた謙遜者の対応」の交互作用が有意であった（F (2,174)=13.44, p <.001, η^2=.053）。単純主効果の検定及び多重比較の結果(Table 4-1, Table 4-2)，単純持ち上げ，賞賛持ち上げ，比較持ち上げすべてにおいて，再謙遜より受け入れのほうが気分がよくなっていた（F (1,54)=16.45, p <.001, η^2=.143 ; F (1,59)=98.62, p <.001, η^2=.442 ; F (1,61)=5.46, p <.05, η^2=033）。また，謙遜受け入れ時には，賞賛持ち上げ，単純持ち上げ，比較持ち上げのそれぞれの間に差が見られ，賞賛持ち上げがもっとも気分がよく，比較持ち上げがもっとも気分がよくなかった（F (2,174)=14.56, p <.001, η^2=.143）。再謙遜時には差がみられなかった((2,174)=0.94, n.s. , η^2=.011)。

Table 4-1 「気分がいい」に関する単純主効果

要因	*SS*	*df*	*MS*	*F*-ratio	*p*-value	eta^2
再謙遜における持ち上げ方法	2.05	2	1.03	0.94	0.393 ns	0.011
受け入れにおける持ち上げ方法	58.81	2	29.41	14.56	0.000 ***	0.143
単純持ち上げにおける謙遜者の反応	30.58	1	30.58	16.45	0.000 ***	0.143
賞賛持ち上げにおける謙遜者の反応	126.08	1	126.08	98.62	0.000 ***	0.442
比較持ち上げにおける謙遜者の反応	75.43	1	6.78	5.46	0.023 *	0.033

*p < .05, ***p < .001

Table 4-2　受け入れの際の持ち上げ条件間の「気分がいい」得点の差

	Diff	t-value	df	p	adj.p		
賞賛持ち上げー比較持ち上げ	1.39	5.39	174	0.000	0.000	賞賛持ち上げ＞比較持ち上げ	*
単純持ち上げー賞賛持ち上げ	-0.74	2.80	174	0.011	0.011	単純持ち上げ<賞賛持ち上げ	*
単純持ち上げー比較持ち上げ	0.65	2.45	174	0.015	0.015	単純持ち上げ>比較持ち上げ	*

否定感情：嫌な気持ち　「謙遜の受け手の持ち上げ方法」と「持ち上げられた謙遜者の反応」の交互作用が有意であった（F (2,174) =12.62, p <.001, η^2=.053）。単純主効果の検定及び多重比較の結果(Table 5-1, Table 5-2)，単純持ち上げと賞賛持ち上げにおいて，受け入れより再謙遜のほうが嫌な気持ちを感じていた（F (1,54) =16.22, p <.001, η^2=.103 ; F (1,59) =35.50, p <.001, η^2=.197）。比較持ち上げでは差がみられなかった（F (1,61) =1.30, n.s. , η^2=.009）。また，謙遜受け入れ時には，単純持ち上げと賞賛持ち上げよりも比較持ち上げのほうが嫌な気持ちを感じていた（F (2,174) =10.32, p <.001, η^2=.106）。再謙遜時には差がみられなかった（F (2,174) =2.52, n.s. , η^2=.028）。

Table 5-1 「嫌な気持ち」に関する単純主効果

要因	*SS*	*df*	*MS*	*F*-ratio	*p*-value	eta^2
再謙遜における持ち上げ方法	9.98	2	4.99	2.52	0.083 †	0.028
受け入れにおける持ち上げ方法	32.23	2	16.12	10.32	0.000 ***	0.106
単純持ち上げにおける謙遜者の反応	21.83	1	21.83	16.22	0.000 ***	0.103
賞賛持ち上げにおける謙遜者の反応	43.20	1	43.20	35.50	0.000 ***	0.197
比較持ち上げにおける謙遜者の反応	2.33	1	2.33	1.30	0.258 ns	0.009

† p < .10, ***p < .001

Table 5-2　受け入れの際の持ち上げ条件間の「嫌な気持ち」得点の差

	Diff	t-value	df	p	adj.p	
賞賛持ち上げー比較持ち上げ	-1.02	4.50	174	0.000	0.000	賞賛持ち上げ＜比較持ち上げ *
単純持ち上げー比較持ち上げ	-0.63	2.73	174	0.007	0.014	単純持ち上げ<比較持ち上げ *
単純持ち上げー賞賛持ち上げ	0.39	1.66	174	0.100	0.100	単純持ち上げ＝賞賛持ち上げ

否定感情：納得いかない　「謙遜の受け手の持ち上げ方法」と「持ち上げられた謙遜者の対応」の交互作用が有意であった（F (2,174)=9.19, p <.01, η^2=.002）。単純主効果の検定及び多重比較の結果（Table 6-1, Table 6-2），単純持ち上げと賞賛持ち上げにおいて，受け入れより再謙遜のほうが納得していなかった（F (1,54) =13.01, p <.001, η^2=.103 ; F (1,59)=33.40, p <.001, η^2=.204）。比較持ち上げでは差がみられなかった（F (1,61)=2.29, n.s. , η^2=.017）。また，謙遜受け入れ時には，賞賛持ち上げよりも比較持ち上げのほうが納得していなかった（F (2,174)=6.78, p <.05, η^2=.043）。再謙遜時は差がみられなかった（F (2,174)=1.60, n.s. , η^2=.018）。

Table 6-1 「納得いかない」に関する単純主効果

要因	*SS*	*df*	*MS*	*F*-ratio	*p*-value	eta^2
再謙遜における持ち上げ方法	7.18	2	3.59	1.60	0.204 ns	0.018
受け入れにおける持ち上げ方法	13.56	2	6.78	3.88	0.022 *	0.043
単純持ち上げにおける謙遜者の反応	25.54	1	25.54	13.01	0.007 ***	0.103
賞賛持ち上げにおける謙遜者の反応	63.08	1	63.08	33.40	0.000 ***	0.204
比較持ち上げにおける謙遜者の反応	3.90	1	3.90	2.29	0.136 ns	0.017

*p < .05, ***p < .001

Table 6-2　受け入れの際の持ち上げ条件間の「納得いかない」得点の差

	Diff	t-value	df	p	adj.p	
賞賛持ち上げー比較持ち上げ	-0.65	2.74	174	0.007	0.021	賞賛持ち上げ＜比較持ち上げ *
単純持ち上げー賞賛持ち上げ	0.45	1.81	174	0.073	0.145	単純持ち上げ=賞賛持ち上げ
単純持ち上げー比較持ち上げ	-0.21	0.86	174	0.393	0.393	単純持ち上げ＝比較持ち上げ

否定感情：むっとする　「謙遜の受け手の持ち上げ方法」と「持ち上げられた謙遜者の対応」の交互作用が有意であった（F (2,174)=8.48, p <.01, η^2=.024）。単純主効果の検定及び多重比較の結果（Table 7-1, Table 7-2），単純持ち上げと賞賛持ち上げにおいて，受け入れより再謙遜のほうがむっとしていた（F (1,54)=14.92, p <.001, η^2=.067 ; F (1,59)=27.96, p <.001, η^2=.163）。比較持ち上げでは差がみられなかった（F (1,61) =0.23, n.s. , η^2=.002）。また，謙遜受け入れ時には，単純持ち上げと賞賛持ち上げよりも比較持ち上げのほうがむっとしていた（F (2,174)=6.83, p=.001, η^2=.073）。再謙遜時は差がみられなかった（F (2,174)=0.40, n.s. , η^2=.005）。

Table 7-1 「むっとする」に関する単純主効果

要因	*SS*	*df*	*MS*	*F*-ratio	*p*-value	eta^2
再謙遜における持ち上げ方法	1.64	2	0.82	0.40	0.669 ns	0.005
受け入れにおける持ち上げ方法	22.97	2	11.49	6.83	0.001 **	0.073
単純持ち上げにおける謙遜者の反応	12.45	1	12.45	14.92	0.000 ***	0.067
賞賛持ち上げにおける謙遜者の反応	40.83	1	40.83	27.96	0.000 ***	0.163
比較持ち上げにおける謙遜者の反応	0.40	1	0.40	0.23	0.635 ns	0.002

**p < .01, ***p < .001

Table 7-2　受け入れの際の持ち上げ条件間の「むっとする」得点の差

	Diff	t-value	df	p	adj.p	
賞賛持ち上げー比較持ち上げ	-0.85	3.63	174	0.000	0.001	賞賛持ち上げ＜比較持ち上げ *
単純持ち上げー比較持ち上げ	-0.56	2.35	174	0.020	0.040	単純持ち上げ＜比較持ち上げ *
単純持ち上げー賞賛持ち上げ	0.29	1.19	174	0.236	0.236	単純持ち上げ＝賞賛持ち上げ

スムーズ感：違和感　「謙遜の受け手の持ち上げ方法」と「持ち上げられた謙遜者の対応」の交互作用が有意であった（F (2,174)=5.18, p <.01, η^2=.024）。単純主効果の検定及び多重比較の結果（Table 8-1, Table 8-2），単純持ち上げと賞賛持ち上げでは，謙遜の受け入れより再謙遜のほうが違和感が強かった（F (1,54)=6.40, p <.05, η^2=.050 ; F (1,59) =31.63, p <.001, η^2=.191）。比較持ち上げでは差が見られなかった（F (1,174) =0.87, n.s , η^2=.006）。また賞賛持ち上げよりも単純持ち上げと比較持ち上げのほうが謙遜受け入れ時の違和感が強かった（F (2,174)=6.83, p <.01, η^2=.073）。再謙遜時は差がみられなかった（F (2,174) =0.38, n.s. , η^2= 0.00）。

Table 8-1 「違和感」に関する単純主効果

要因	*SS*	*df*	*MS*	*F*-ratio	*p*-value	eta^2
再謙遜における持ち上げ方法	1.86	2	0.93	0.38	0.683 ns	0.004
受け入れにおける持ち上げ方法	27.21	2	13.61	6.83	0.001 **	0.073
単純持ち上げにおける謙遜者の反応	12.45	1	12.45	6.40	0.014 *	0.050
賞賛持ち上げにおける謙遜者の反応	57.41	1	57.41	31.63	0.000 ***	0.191
比較持ち上げにおける謙遜者の反応	1.81	1	1.81	0.87	0.354 ns	0.006

*p < .05, **p < .01, ***p < .001

Table 8-2　受け入れの際の持ち上げ条件間の「違和感」得点の差

	Diff	t-value	df	p	adj.p	
賞賛持ち上げー比較持ち上げ	-0.91	3.57	174	0.001	0.001	賞賛持ち上げ＜比較持ち上げ *
単純持ち上げー賞賛持ち上げ	0.68	2.58	174	0.011	0.021	単純持ち上げ＜賞賛持ち上げ *
単純持ち上げー比較持ち上げ	-0.23	0.89	174	0.374	0.374	単純持ち上げ＝比較持ち上げ

スムーズ感：自然さ　「謙遜の受け手の持ち上げ方法」と「持ち上げられた謙遜者の対応」の交互作用が有意であった（F (2,174)=4.63, p <.05, η^2=.021）。単純主効果の検定及び多重比較の結果（Table 9-1, Table 9-2），賞賛持ち上げでは，再謙遜より謙遜の受け入れのほうが自然さを感じていた（F (1,59)=24.43, p <.001, η^2=.163）。単純持ち上げと比較持ち上げでは差がみられなかった（F (1,54) =1.94, n.s. , η^2=.015 ; F (1,61)=0.87, n.s. , η^2=.006）。また，謙遜受け入れ時には，単純持ち上げと比較持ち上げよりも賞賛持ち上げのほうが自然さを感じていた（F (2,174)= 5.58, p <.01, η^2=073）。再謙遜時は差がみられなかった（F (2,174)=0.23, n.s. , η^2=.003）。

Table 9-1 「自然さ」に関する単純主効果

要因	*SS*	*df*	*MS*	*F*-ratio	*p*-value	eta^2
再謙遜における持ち上げ方法	0.94	2	0.47	0.23	0.794 ns	0.004
受け入れにおける持ち上げ方法	22.07	2	11.03	5.58	0.005 **	0.073
単純持ち上げにおける謙遜者の反応	2.95	1	2.95	1.94	0.170 ns	0.050
賞賛持ち上げにおける謙遜者の反応	39.68	1	39.68	24.43	0.000 ***	0.191
比較持ち上げにおける謙遜者の反応	1.58	1	1.58	0.87	0.356 ns	0.006

**p < .01, ***p < .001

Table 9-2　受け入れの際の持ち上げ条件間の「自然さ」得点の差

	Diff	t-value	df	p	adj.p	
賞賛持ち上げー比較持ち上げ	0.81	3.18	174	0.002	0.005	賞賛持ち上げ＞比較持ち上げ *
単純持ち上げー賞賛持ち上げ	-0.65	2.46	174	0.015	0.030	単純持ち上げ＜賞賛持ち上げ *
単純持ち上げー比較持ち上げ	0.16	0.63	174	0.529	0.529	単純持ち上げ＝比較持ち上げ

４．考察

「受け手が単純持ち上げを行ったあとは受け入れられることと再謙遜されることへの期待に差は見られないが，賞賛持ち上げや比較持ち上げを行ったあとは受け入れられることよりも再謙遜されることを期待する。」という仮説１についての結果をまとめると以下のようになる。

第一に，単純持ち上げのあとでは，７項目のうち６項目の気持ちに有意な差がみられ，仮説１－１は支持されなかった。単純持ち上げのあと，受け手は再謙遜より受け入れられた方が「安心」「気分がいい」のポジティブ感情の得点が高く，「嫌な気持ち」「納得いかない」「むっとする」のネガティブ感情の得点が低く，「違和感」が低い点でスムーズさを感じていたことから，単純持ち上げのあとには再謙遜されることより受け入れられることを期待していたといえる。

第二に，賞賛持ち上げのあとでは，７項目の気持ちすべてに有意な差がみられ，再謙遜より受け入れられた方が「安心」「気分がいい」のポジティブ感情の得点が高く，「嫌な気持ち」「納得いかない」「むっとする」のネガティブ感情の得点が低く，「違和感」が低く，「自然さ」が高い点でスムーズさを感じており，仮説１－２は支持されなかった。賞賛持ち上げのあとには再謙遜されることより受け入れられることを期待していたということになる。

第三に，比較持ち上げのあとでは，２項目の気持ちのみに有意な差がみられ，再謙遜より受け入れられた方が「安心」「気分がいい」のポジティブな感情が強く，ネガティブ感情やスムーズ感では差

がみられなかったため，仮説１－３は支持されなかった。ポジティブな感情の強さのみ説明するならば，受け手は比較持ち上げのあとには再謙遜されることより受け入れられることを期待していたということになる。

このように３つの作業仮説はすべて支持されず，仮説１は全体として支持されない結果となり，すべての方法において受け手は再謙遜されることよりも受け入れられることを期待していることが明らかとなった。

次に，「謙遜の受け手は持ち上げの程度が強いほどその持ち上げが受け入れられることを期待せず，再謙遜されることを期待している。」という仮説２についての結果をまとめると以下のようになる。

まず，謙遜者に持ち上げを受け入れられた際には，７つの項目すべてにおいて，直前に行った持ち上げ方法の効果がみられた。受け手が比較持ち上げを行っていた場合，他の２つの方法よりも「安心」「気分がいい」のポジティブな感情が弱く，「嫌な気持ち」「納得いかない」「むっとする」のネガティブな感情が強かった点で仮説2-1は支持された。しかしながら，スムーズ感の得点では，比較持ち上げと単純持ち上げの差はみられなかった点，そして，賞賛持ち上げと単純持ち上げの間では，「気分がいい」「違和感」「自然さ」の項目で差がみられ，単純持ち上げのほうが気分のよさを感じず，違和感が強く，自然さを感じていなかった点は仮説2-1に反する結果であり，仮説２－１は一部支持されたといえる。

また，謙遜者が再謙遜を行った際には，どの項目においても謙遜の持ち上げ方法の間に差がみられず仮説２－２は支持されなかった。

このように，２つの作業仮説のうち一部は支持されたが，仮説２は全体としてほとんど支持されない結果となった。具体的には，最も持ち上げの程度が強い比較持ち上げ時に受け入れへの期待が最も低かった点は仮説２を一部支持していたが，単純持ち上げと賞賛持ち上げの順序が逆転し，持ち上げの度合いが２番目に高いと思われた賞賛持ち上げのほうが単純持ち上げより受け入れを期待していた点と，再謙遜の際に持ち上げ方法間に差がみられなかった点は仮説２を支持しない結果であった。

全体として，謙遜の受け手は持ち上げ方法によらず，再謙遜されることより持ち上げを受け入れられることを期待していること，賞賛持ち上げ・単純持ち上げ・比較持ち上げの順に受け入れを期待することの２点が示された。このような結果になった理由として考えられることを以下にまとめる。

まず，再謙遜より受け入れを期待した理由について考えられることは３点ある。１点目は，作為性による謙遜の印象の低下である。稲富・山口（2003）は，自己卑下呈示に対して受け手が作為性を高く認知するとき，呈示者の印象が否定的な内容になることを明らかにした。自発的謙遜はゼロの状態から自主的に自らの評価を低めるものであるため，また，今回の想定場面において，謙遜者は先生に褒められているのにもかかわらず謙遜を行っているため，受け手が作為性を感じた可能性がある。作為性の感知によって，１回目の謙遜から良い印象を抱いていなかったとすると，再謙遜はより印象が悪く，どの持ち上げ方法においても同等に悪い印象になり，仮説１が支持されず，受け手は持ち上げ方法によらず再謙遜より受け入れを期待していたこと，そして仮説２が支持されず，謙遜者が再謙遜を行った際には持ち上げ方法による差がみられなかったことを説明することができる。

２点目は，謙遜場面に先生からの褒めが明記されていたことによる，再謙遜の不自然さである。褒めの対象を功績，能力，性格，外見，所属，所有物，家族の７つに区分し，それぞれの褒めに対する謙遜の表現方法を研究した上野・上山（2020）は，目に見える結果として残っているという点で「功績」を「能力」と区別した。そして，「功績」には外部からの評価など自分で統制できない部分が加わるため，褒められた内容自体は否定せず，自分の力によらないことを伝える謙遜表現があると述べている。例えば，「自分でもびっくりである」「運が良かっただけである」「たまたまである」といった表現方法である。本研究では，謙遜者は発表を先生に褒められており，それが受け手にとっても明

確なものであるため，「功績」の謙遜を行っていると言える。しかし，再謙遜場面で謙遜者は「いやいや，全然うまくいかなかったんだって」と，発表の出来自体を否定している。肯定的評価という点で持ち上げは褒めと類似していると考えると，客観的評価があるのにもかかわらず持ち上げた内容，つまり発表の出来自体を否定する再謙遜の表現は，受け手が不自然に感じる可能性がある。

３点目は，本研究の対象が大学生であったことによる，コミュニケーション方略の偏りである。世代間による「ほめ」への返答スタイルの違いを検討した小池（2000）は，社会人と学生を比較するために調査対象者を22歳以下と23歳以上に区別した。その結果，「ほめ」への返答として22歳以下より23歳以上のほうが「否定・謙遜」を多く用いていた。このことから，22歳歳以下である大学生は「否定・謙遜」をあまり用いない世代であるため，再謙遜を期待しなかった可能性が考えられる。

次に，賞賛持ち上げ・単純持ち上げ・比較持ち上げの順に受け入れを期待しており，単純持ち上げより賞賛持ち上げのほうが持ち上げの度合いが強いのにもかかわらず受け入れを期待していた理由として考えられることは２点ある。

１点目は，褒めが持ち上げを受け入れる理由になり，持ち上げの効果を消してしまった可能性である。褒めが持ち上げの度合いを高めたのではなく，褒めによってどのような持ち上げであっても謙遜者の受け入れを自然なものにしてしまい，受け手は持ち上げが受け入れられることに納得したのかもしれない。実際，スムーズ感に関する得点をみると，賞賛持ち上げを受け入れた条件で「違和感」が最も低く，「自然さ」が最も高かった（Table 2）。

２点目は，褒めの付け加えによって受け手は受け入れられることに納得したというよりは，褒めを受け入れてほしいとむしろ積極的に期待した可能性である。対人関係別で「褒め」への返答スタイル研究した小池（2000）では，友人関係では20％が褒めに対して「否定・謙遜」をしたが，残りの80％は礼を言う・照れる・褒め返すなどの「肯定的反応」や，単に説明する・何も言わないなどの「中立的反応」であった。友人関係の場合には褒めを否定したり謙遜したりすることは少ないため，褒める際にも相手から再謙遜されることよりも受け入れられることを期待したのかもしれない。

５．本研究のまとめと今後の展望

本研究の目的は，謙遜の受け手が「そんなことないよ」と謙遜者を持ち上げた後の謙遜者の対応について，受け手がどのような期待をしているのかを明らかにすることであった。検討の結果，比較持ち上げ，賞賛持ち上げ，単純持ち上げすべての方法において，受け手は再謙遜よりも受け入れを期待することが明らかになり，全体として仮説とは逆の結果が得られた。上述のとおり，再謙遜が期待されなかった理由としては，本研究で扱った謙遜が自発的謙遜であったことや，場面呈示に先生からの褒めが明記されていたこと，実験参加者が大学生に偏っていたことなどが考えられる。しかし，謙遜の受け手が自らを卑下して相手を持ち上げる，持ち上げの程度が強い比較持ち上げであっても，再謙遜よりも受け入れを期待していたことは，謙遜は何度も行うことで印象が下がる可能性を示唆しているとも考えられる。もしそうであるならば，謙遜者は受け手から持ち上げられた際は，謙遜を繰り返すのではなく一度でやめた方が好印象を得る可能性がある。

ただし，本研究で得られたこれらの知見は，謙遜者と受け手が知人以上親友未満の友人の関係であり，２者間の能力や立場が同程度であり，謙遜者が褒めなどのきっかけなく自ら謙遜を行うという限られたコミュニケーション場面で得られたものである。そのため，今後はコミュニケーション場面をより拡張し，大学生以外の世代や家族・職場などの人間関係の場合などでの研究を行うことが必要であると考えられる。

引用文献

相川　充（2003）．謙遜行動に及ぼす社会的スキルの効果に関する実験的検討．東京学芸大学紀要（教育科学），54, 93-101.

Heine, S. J., Takata, T., & Lehman, D. R.（2000）. Beyond self-presentation : Evidence for Japanese self-criticism Among Japanese. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 26, 71-78.

Heine, Kitayama, Lehman, Takata, Ide, Leung, & Matsumoto.（2001）. Divergent Consequences of Success and Failure in Japan and North America: An Investigation of Self-Improving Motivations and Malleable Selves. *Journal of Personality and Social Psychology*. 81, 599-615.

樋口匡貴・川村千賀子・原　郁水・塚脇涼太・深田博己（2007）．対人印象に及ぼす自己卑下呈示の効果の規定因．広島大学心理研究，7, 103-108.

稲富　健・山口裕幸（2004）．自己卑下呈示が受け手に与える印象－受け手が認知する呈示者の作為性との関連－．九州大学心理学研究，5, 201-206.

福島　治（1996）．身近な対人関係における自己呈示：望ましい自己イメージの呈示と自尊心及び対人不安の関係．社会心理学研究，12, 20-32.

石黒　格・村上史朗（2007）．関係性が自己卑下的自己呈示に及ぼす効果．社会心理学研究，23, 33-44.

伊藤忠弘（1998）．特性自尊心と自己防衛・高揚行動．心理学評論，41, 57-72.

笠置　遊・外山みどり・大坊郁夫（2008）．会話中における話者の自己呈示スタイルの相互関連性．対人社会心理学研究，8, 59-64.

北山　忍（1994）．文化的自己観と心理プロセス．社会心理学研究，10, 153-167.

北山　忍・唐澤真弓（1995）自己：文化心理学的視座．実験社会心理学研究，35, 133-163.

北山　忍・高木浩人・松本寿弥（1995）．成功と失敗の起因－日本的自己の文化心理学－．心理学評論，38, 247-280.

北山　忍（1998）．自己と感情－文化心理学による問いかけ．日本認知科学会（編）認知科学モノグラフ9．共立出版.

小池浩子（2000）．「ほめ」への返答に関する副次文化的比較：対人関係別，性別，世代間．信州大学教育学部紀要，100, 47-55.

栗原克臣（1995）．自己呈示－用語の区別と分類－．　名古屋大学教育学部紀要（教育心理学科），42, 107-114.

Leary, M. R., & Kowalski, R. M.（1990）. Impression Management: A Literature Review and Two-Component Model. *Psychological Bulletin*, 107, 34-47.

Leary, M. R., Nezlek, J. B., Downs, D., Radford-Davenport, J., Martin, J., & McMullen, A.（1994）. Self-presentation in Everyday Interactions: Effects of Target Familiarity and Gender Composition. *Journal of Personality and Social Psychology*, 67, 664-673.

Markus, H. R., & Kitayama, S.（1991）. Cultural and the Self : Implication for cognition, emotion, and motivation. *Psychological Review*, 98, 224-257.

村上史郎・石黒　格（2005）．謙遜の生起に対するコミュニケーション・ターゲットの効果．社会心理学研究，21, 1-11.

村本由紀子・山口勧（1997）．もう一つのSelf-serving bias：日本人の帰属における自己卑下・集団奉仕傾向の共存とその意味について．実験社会心理学研究，37, 65-75.

沼崎　誠・工藤恵理子（2003）．自己高揚的呈示と自己卑下的呈示が呈示者の能力の推定に及ぼす効果－実験室実験とシナリオ実験との相違－．実験社会心理学研究，43, 36-51.

大野敬代（2010）．日本語談話における「働きかけ」と「わきまえ」の研究－目上に対する「ほめ」と「謙遜」の分析を中心に－．早稲田大学大学院教育学研究科博士論文（未刊行）

鈴木直人・山岸俊男（2004）．日本人の自己卑下と自己高揚に関する実験研究．社会心理学研究，**20**，17-25．

Taylor, S. E., Neter, E., & Wayment, H. A.（1995）. Self-evaluation processes. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **21**, 1278-1287.

Tice, D. M., Butler, J. L., Muraven, M. B., & Stillwell, A. M. (1995). When modesty prevails: Differential favorability of self-presentation to friends and strangers. *Journal of Personality and Social Psychology*, **69** (6), 1120–1138.

Triandis, H. C. (1989). The self and social behavior in differing cultural contexts. *Psychological Review*, **96** (3), 506–520.

築島謙三（1976）．文化の構造とことば．芳賀綏（編）．日本語講座第三巻　社会の中の日本語．大修館書店．

上野聡子・上山あゆみ（2020）．謙遜の相槌とほめの対象．言語処理学会．

吉富千恵（2007）．謙遜表現に関する多面的検討．龍谷大學論集，**469**, 138-168.

吉田綾乃（2014）．自己卑下呈示が受け手の自己評価に及ぼす影響：対人関係，自己呈示の信憑性および自己呈示規範内在化傾向との関連性の検討．東北福祉大学研究紀要，**38**, 105-116.

吉田綾乃・浦　光博（2003）．自己卑下呈示を通した直感的・間接的な適応促進効果の検討．実験社会心理学研究，**42**, 120-130.

吉田綾乃・浦　光博・黒川正流（2004）．日本人の自己卑下呈示に関する研究：他者反応に注目して．社会心理学研究，**20**, 114-151.

吉田寿夫・古城和敬・加来秀俊（1982）．児童の自己呈示の発達に関する研究．教育心理学研究，**30**，120-127.